

片岡良一

『行人』と

『ころろ』の実験



『行人』と『こゝろ』の実験



## 『行人』

『行人』は次の『こゝろ』とあわせて、『彼岸過迄』に語られた「須永の話」の延長（発展）であった。「須永の話」で愛しながら愛し合えない男女関係を描いた作者は、ここでは融和し得ない夫婦関係を中心とした家の生活を材料として、限りない懷疑——というよりひとに對する不信と孤独地獄の苦惱、及びそれらと背中合せのものである荒涼たる生の趣きを主として追求したのである。それだけは尽さぬ意図もこめられていたようだが、

結果的には少くともそれを主としたものになっている。

大正元年の十二月から翌二年の十一月までかかって完成された長篇小説である。「友達」「兄」「帰ってから」「塵勞」の四部から成っている。

が、それがそうしてはじめてから主題も追求の方向も決っていた実験小説であったため、その各部分は少くとも『彼岸過迄』の場合よりずっと緊密な関係をもつてつながり合されたものになっている。尤も作者ははじめ「帰ってから」までの三部だけで作品を完結させる予定であったのが、例によって意外にのびたのと、その間にまた病

気で倒れたため、しばらく休んだ後改めて「帰ってから」  
 の終りの方と新しい「塵勞」一章とを書き加えることにな  
 ったのだという（小宮豊隆『漱石の芸術』参照）。が、それは恐らく分量  
 と追求の密度とが変っただけで、構想としてはそれほど  
 の変化はなかったのではないかと思われる。『彼岸過迄』  
 の場合にもそれが髣髴されぬでもなかったような、はじ  
 めは遠く方のしかも外側から一見何気なさそうにたぐり  
 はじめられた糸（網の目）が、だんだんにひきしぼられ  
 て、最後に内側から問題の中心点を浮き出させるとい  
 う運びが、ここにはいかにも段取り正しく進められている

のだから。『彼岸過迄』の連句的構成の中に朧ろげに浮び上つて来たかたちが、少くともここで明確に意識化された追求の方法になったのだと思う。

だからこの作では、最初の章である「友達」を読むことによって、作者が何を書こうと予定しているのかを、おおよそには推定することが出来るようになってい

る。一つはいうまでもなく岡田とお兼さんの場合である。彼等はいかにも手軽く結び合わされた一組であるように語られている。もう一つは今現に進行中のお貞さんと佐



野との縁談である。これも極めて手軽く——という以上にむしろ無責任なまでの安易さをもつて取り進められている。いずれにしても、結婚とはこんなに手軽なものかと思わずにおかぬような書きぶりである。

しかもそこには、第二の主題として、人と人との距離の遠さ——人と人とはとうてい正しく理解し合えないものだということが語られている。二郎の友人三澤は二郎との約束を破って病院に入ったまま動かない。二郎から見ると大した病気でもなさそうなのに、彼はそれを非常に重大なものらしく扱っているばかりか、「他の病苦はひと

岡目にはわからぬものだ」と嘆息してみせる。それはいかにも何気ないことのように語られているけれど、そこに人間相互がほんとに深く微妙な内部の消息には触れ合えぬものだということが、ほのめかされているのでなければならぬ。そういう深刻な内容に連なるものであるため、この話は、第三の、これは破綻に終わった結婚生活の話に結びつけられている。結婚生活に破れて気の違った女の話を持ち出して、人間は結局気が違わねば本音を漏らさぬ——つまりその真意（本体）はわからぬものであることを匂わせているのである。しかも三澤は、その

狂女の漏らす真実の声と思われるものを、それが別れた夫に対するものか自分に対するものかほんとはわからぬままに、自分に対するものと信じたがっているのである。人間はそれほど真実を欲しているのだというのではないであろうか。それほどに真実を欲していながら普通の状態ではそれが得られないのだとすると、事態は極めて悲劇的だということにならずにはいない。

のみならず、そうして相手の真実がわからぬままに、人間はお互に傷つけ合ってしまうものなのだということも、同じ三澤によって語られている。彼が或る芸者に酒

をのませたため彼女の病気を悪化させて、同じ病院に重症患者として入院させることになったというのである。しかもそうして知らずに犯した罪の怖ろしさを思う三澤が案ずるほどには、誰も彼女のことを心配していない。母親さえ落着いた看病はしてやれないのである。華やかな稼業をしている女の孤独さとその苦痛に静かにたえている心細さがそこから引出される。「忍耐の像」——作者はそんな言葉をさえ用いていた。

その他なお細かいことはいろいろに書かれているけれど、とにかく以上のような材料をそろえたただけで、この

作が、おろそかに結び合わされたが故に理解し合えない夫婦関係の悲劇を——それ故の疑惑や孤独感やその間に相互に傷つけ合う罪の怖ろしさなどを、追求しようとする意図を持つのであることは、臆ろげならず推定されることになるのではないか。いわば作者はここで計算し尽された伏線をはりめぐらした上で、おもむろに予定された主題の展開にとりかかろうとしたのである。

だから次の「兄」では、作者は予定通りにこの作の主人公一郎夫妻のしつくりと融け合わぬ夫婦生活を持ち出し、それ故の妻に対する疑惑から、一郎が無理に弟の

二郎に妻の貞操を試めさせようとすることになる。妻は  
いかなる場合にも夫に対して貞潔であるものという道德  
の支配力を信ずるものでなければ、とうてい思いつかぬ  
ようなこの運びは、すでに『坑夫』などで人間は境遇や  
周囲の条件によってどうにでも動かされてしまうもので  
あることを書いて来た漱石として、あまりにも不自然過  
ぎた馬鹿々々しい作為であることを思わせずにはおかぬ  
けれど、それだけ疑惑の深さやそれ故に陥った一郎の痴  
愚を示すものにはなるう。そんなにして試されるなどと  
いう侮辱的な扱いを受けた妻の直が、ふだんは例の東洋

的な「忍耐」をもつて何事もないように静かに振舞って  
いながら、いざとなると雷火に打たれるような「ロマン  
ティックな」死を望んだり、男の臆病さを笑ったり、か  
と思うと自分のもう俯抜けのようになってしまっている  
のを慨いたりするのは、やはり抑圧の重さ故の鬱屈や崩  
折れかかった心の弱さやその間から時あつて漏れる反逆  
の心などを示すものである。いずれも索引のつけられ  
たような心理のあらわれだと思ふし、そこに夫である一  
郎によつて害われた彼女の一面をも見ることが出来るわ  
けだが、二郎はそのあらわれの多端さを理解しそこねて、

結局女はわからぬものだという、兄と同じような結論に到達せざるを得なかったのである。わずかに彼女は兄のいうようにスピリットのない女ではなく、はたらきかけようでは温く燃え上らせることも出来る女なのだが、兄にはそのはたらきかけ方がわからず、嫂の方も兄に対して同じような関係にあるのだ、ということだけを彼は理解しているのである。そうして何故直がそうなたかについてはこの作には別段の探求はないけれど、一郎がひとり孤独の底深く沈湎していなければならぬ事情については、この「兄」の章にかなりいろいろのことが



述べられているのである。

その第一は彼が長男として、家族の誰からも一目おいた別扱いをされるといふ事情であり、そこから来た彼のわがままが同時にそこには計算されている。つまり旧い家族制度における長男偏重がもたらす暗い影である。作品にはほとんど何も書かれていない直の場合が、これに似た旧い道徳から来る女性生活への制約の影なのであることは、多くいうを要すまい。これは後の部分で語られることだが、「植えられてしまったきり動くことが出来ない」のをその宿命とした女性は、自分の「スピリット」

によつて積極的に生きることが許されていなかつたのである。だからそのロマンティックな激情は容易に死と結びつくようなことにもなつていたのであろう。極端に言えば、「忍耐の像」を象徴とする彼女等にとつては、死ぬ以外に解放があり得ないのである。容易に激情的な動き方をする千代子の場合にさえ、須永の構える埒を踏みこえる自主性や積極性はあるか。ないか。

第二はむしろ神経的なまでの潔癖さと卒直さや正直さの尊重である。二郎の借金を返すための金を、母が彼には知れぬようにひそかに手渡すというような、かげでこ

そこそやることとか、もう昔ほどでもない父の勢力を昔のままのものであるかのように振り廻す母の嘘とかいうものが、一郎を反撥させずにはおかないのである。前者にはどこか家長的な支配欲のかけがあり、後者には単純な誤信を手段的な欺瞞と見ているような、かえってすなおでないものが感じられぬでもないけれど、とにかくそこには資本主義的社会生活のあり方と支配されたものの小狡さとに対する、儒教育ちのインテリらしい反撥が感じられる。明治時代の多くの作家にとってと同じように、漱石にとってはそれが終始変らぬ立場であつた。そ

の立場を信ずるが故に、彼は一郎とともに、自分の方が周囲のものより高いところに住んでいるのを信ずることが出来たのである。

が、この作の場合には、より以上に注意さるべき第三の観点として、学問に対する否定的な見方の強化があげられる。それは既に『三四郎』の頃からあらわれはじめていたものであり、次の『こゝろ』では伝統を無視した明治文化のあり方の問題として特に反省的に追求されるようになったものであるけれど、ここではなお『三四郎』同様の漠然性を残して、学問することが民衆生活からの

乖離を生み、学問に精進することが社交から遠ざからせる結果になるのを、怨むにも似た疑惑をこめて語っているに過ぎない。当然究め残された問題はなお多く残るけれど、それなりにこれは、従来とかく民衆一般の意識の低さに侮蔑を向けがちであつた知識人——漱石もその一人であつた——が、改めて自分自身に批判の目を向けはじめたものとして注意されなければならない。反面なお漱石には上記の通りの優越意識もあつたのだから、これはまだ決して醇化されたものではなかつたけれど、そこに彼における自照性への一步前進が認められるのもいう

までもあるまい。とにかくそうして自分の学問を疑うようになつた一郎は、同時に多知多解の弊を嘆き、考えて考えてただ考えぬくばかりで信ずることの出来ない苦しさから、何も考えない人間のすなおさや素朴さを何よりも尊ぼうとするようになっていたのである。「須永の話」の作に当る人物として、この作にはお貞さんがまずそういう彼に尊ばれる人物として描かれている。

以上の諸点ほど直接的に彼の疑惑や孤独感と結びついて行くものかどうか疑問だけれど、一郎についてはなお、彼がいろいろの事件の切断面や情景は鮮かに記憶してい

るけれど、その事件の経緯やはつきりした場所の関係などには一向注意を向けない、という性質のことが語られている。物事を秩序立てた因果の関係において理解しようとする科学的探求でなく、情景の輪廓や陰翳を楽しもうとする低徊趣味を態度とすることの指摘である。それは、低徊趣味の無力さに対する反省がようやくほんとに作者のものとなって来たのであること、それだけ作者が正しい因果の關係をつかもうとする写実主義的意欲に傾いて来たのであることを、思わせずにはおかぬものであるわけだが、それをこうしてこの作中に持ち出したのは、

やはりそういう態度に住する一郎の、当面する問題に対する無力（無策）さを示すためのものであったのである。うか。それともかつて『虞美人草』の小野さんに加えたように、気分や情趣にばかり酔おうとする文学者の態度を難じて、より一義的な道を求める態度の須要さを示唆しようとしたのである。陰鬱な学者である一郎を、特に「詩人」と規定している点などから見れば、存外その後者の方であったのかも知れないと思うが、もしそうだとすれば、これは一郎の罪の意識と遠く呼応したものであったことになる。すでに「友達」の章にその点への



伏線があつたばかりでなく、彼は彼自身の存在故に直を傷つけ害うているのだということをも、後には口に出して語るようになっているのである。「須永の話」の後に出た作品として、そういう意識のほのめくのはもとより当然だし、上記の通りそういう言葉と結びつくような直の心境的なこじれなども描かれておれば、一郎自身が後にはより高い心境への希求をもらすようにもなるのだから、そういう意図に即した追求の気持がこの作にあつたことは否定出来ない。かつて低徊趣味の安易さに反撥した『野分』では、それが反撥という程度の浅い動きであ

つたために、動いた後にもなお他を裁くという気持に  
かなれなかつた作者が、こうして深く自分の道を求めず  
にはいられぬようになった気持を、示しはじめたともい  
えるのである。が、この作の「帰ってから」まででは、  
そういう深刻な転機にともなう一郎の反省や悔のあらわ  
れはまだ定かでなく、かえってお貞さんのスポイルされ  
るのを怖れてこれに特別の訓戒を与えるというような、  
何か高いところからその問題を見下ろしているような趣  
さえあるため、その点での感銘や濃い印象はほとんどな  
く、従って作者は一郎同様なお低徊趣味的な手法を凝ら

して、主人公の孤独相だけを描き上げようとしているのであるかの趣をさえ感じさせかねないのである。その意味では用意された実験の装置が全面的に生かされた作品になっていない『行人』なのだと思う。

が、それはとにかく、「兄」の章は、以上のような条件の上に立つ一郎を紹介しながら、彼とその妻との融合えぬすがたを写したもので、そこから二郎と直の和歌の浦行きが強制されるという、乱暴な運びが生れて来ることは上記の通りだが、あらしの夜の後で無事に帰った二人から、その何事もなかったようすを知らされた一郎

は、すっかり安心して気嫌もよくなり、次の章のはじめに書かれた帰京の車中でも、何の疑惑も持たぬ聖人のように眠るのである（滝澤克巳著『夏目漱石』参照）。自分が悪かったと思えばすぐに改めるところもあるし、要するにこの兄にはそういう人柄のよさのあることもいろいろと説明されているのである。そういう兄を二郎と直との関係が強く刺戟するのは、一つには二郎が自分より前から直と知り合っていたという事情がからんでいたからでもあったのである。つまり彼等夫妻は、儀式こそ華やかに取り行われたにしても、型通りに外からの力で結び合わされた二人

であつたに過ぎないのである。それが前章のはじめから手軽な結婚や縁談の進行を持ち出していたのと、呼応する事柄になつていたのであると思ふ。要するに予定された枠の中で融け合えぬ妻を疑う一郎のすがたが、一郎の側におけるその理由をもこめて、ここには主として描き出されていたことになるのである。

次の「歸つてから」では、前章の終りから歸京の途中では上記の通り穏やかになごんでいた一郎の気もちが、またはげしく波立って、彼はついに結婚という形式を疑い、姦通でも真実の愛こそ絶対なものであることを思ふ

ようになつたりする。ただ一人の子供である芳江が一向彼になじまぬことや、世俗的な要領のよさに生きることを得意に感じている父と生活気分の極端に齟齬することなどの上に、二郎と直との関係を疑う気持が一そう強くなつたことが、彼のそういう気もちに拍車をかけているのだが、その結果、ふと漏らされた「一人で出るのか」という質問をかけられた二郎が、ついに家を出て下宿してしまふことになるほか、彼は家族の誰からも一そう憚かられるようになって、いよいよ深い孤独の底に落ちこんで行くことになるのである。恋人に棄られて盲目にな

った女の真実が、要領のいいお座なりだけに生きる父によつて無視されたのを一郎に憤らせたり、和歌の浦行きについて一向誠実な報告をしようとしなない二郎をその父に似ているといつて非難させたりしているのでも明かなように、強く真実を求めると故にかえつて深い孤独に沈示しなければならぬ人間の悲哀な世界が、そこに痛ましくくりひろげられていることになる。

と同時に、そうした兄の苦悩にからんで、ここでは二郎とお重の兄妹二人がとかく神経をとがらせていがみ合っていたり、お重は直には殊にはげしく反撥して彼女と

芳子を奪い合おうとするかの気配を示したり、母の二郎や直に対する疑惑が深まったりしたあげく、次の「塵勞」の章のはじめにかけて、家全体の空気がだんだんにとげとげしく、しかも冷たく氷りついたようなものになって行くのである。そういう点からいえばこの章は、兄の苦悩の深まるとともに、彼の存在がどんなに周囲を毒して行くかを、じっと見つめたようなものになっているのだといえぬこともない。それはまことに荒涼たる世界のすがたであったし、その中心に父と一郎との気持の齟齬が大きな焦点として据えられているのなどを重視すれば、



横に夫婦の關係に安住出来ないばかりでなく、縦の親子の間にも思想的な親和など容易に望み得なかつた時代の不幸が、いよいよ痛切に感じられることになる。が、そういう視点を強調する必要があつたからであらうか、主人公の一郎にそういう荒涼たる空氣に対して一向責任を感じているらしいようすのないことや、二郎の返事をきくまでずっとこだわり通していたのであるに相違ない和歌の浦行き強制に対して、やはり何等の反省らしいものを示していないことなどが、少からず不思議に思われる。現象を外側から細かく觀察するだけで、その由来や

内側には触れようとしなない作者の低徊趣味的態度が、ここではまだ一郎のその点に関する内面の消息は伏せさせているのだというだけで、それは説明しつくされるものではあるまいと思う。

とにかくそういう状態のまま「塵勞」の章に入ると、一郎はついに妻に対して手をあげたり、心靈学に凝って妹のお重を気味悪がらせたりするようになる。直が珍しく二郎の下宿をたずねて、「植えられた以上自分では動けない」境涯のみじめさを訴えたのは、恐らくそうして夫から手を加えられた後のことであろう。揣摩しますれば、

そこには他の動かしてくれるのを待つ彼女のほのかな期待さえかくされていたのかも知れない。にもかかわらず、その頃一方には三澤の新しい縁談が進行しつつあるのであり、その三澤によって、二郎のためにもそれとない見合いが計画されているのである。しかもこの真実を尊ぶ友達によって企てられた見合いは、わずかに相手の横顔三分の二ばかりを遠くの方から眺めただけで、それで一応の決意を強いられるというものになっていて、さすがの二郎にも一抹の疑惑と不安とを感じさせずにはおかぬことになっているのである。はじめに持ち出された

二つの結婚のうち、懸案であったお貞さんのそれが「帰ってから」でとにかく無事に完了した後、またこういう形の二つの縁談が持ち出されているのには、前後照応してそこに一つの寓意がこめられているのを思わせずにはおかない。限りない齟齬や乖離や疑惑や孤独の秘められた苦悩を底深く孕みながら、こうして人間の生活は一見手軽くしかも調和的に進行しているかに見えるのだという感傷が、少くともそこに感じられずにはいないのである。それともそれは周囲ではそうして事もなく運ばれて行くものが、かえって破綻の一步手前まで追いつめられ

るようなことになっているのは、やはり一郎という人間の存在の仕方にそれを必然とするものがあるからだとい  
うのであり、その一郎からの影響が二郎のような人間に  
まで徒らな疑惑や神経性を持たせるようになるというの  
であろうか。そういう点が十分明確にならぬところに、  
漱石の筆力ないし描き方の問題が出て来るのではないか  
と思うが、いずれにしても、「帰ってから」で終るつも  
りであったという作者のはじめの予定では、ことによる  
ところらに最後の切れ目が考えられていたのかも知れな  
いとも思う。それまでほとんど懷疑というものを示さな

かった二郎が、自分の縁談にぶつかってはじめてそれを示すようになったことなど、この作の幕切れとしてかなりふさわしいものでないとはいえないのだから。それともそれは、そうして真剣になった二郎が、兄の問題にもまじめな関心を示しはじめる、そのキツカケを作っただけのものであったのであろうか。とにかく、上記の通り描いてまだいろいろの点に尽さぬものを残していた、その不満を補おうとするかのように、作者は以上のような運びの後で友人のHさんに一郎を旅行につれ出させ、そのHさんから二郎への報告のかたちで作の内面を直接委

曲的に語らせたのである。

だからこの部分は、それまでに描かれた事柄に対する内側からの裏づけである以上に、一郎の内部への周密な探求をくりひろげて、まるで機械化されたもののように、止まることも知らずに後から後から何かし続けずにはいられぬ人間の内部的な衝迫の問題に触れたり、一さいの繋縛を脱して自然と一つに融け合いたい解放への希求を打出したりしている間に、暴力を振った後ではすぐ手をついてあやまるというような、一郎の反省や反射的な自意識の鋭さをくり返し描いている。そうしてそれが最後

には、彼自身が妻を傷つけたのだという、罪の意識と結びつけられるとともに、狂気か死か宗教かというギリギリのところまで、一郎がつれて行かれることになるのである。そうして結局は、半鐘が鳴ればそれは自分が鳴ったことになるのだという、絶対の境地への思慕が語られることになるのである。

この禅宗的な悟りの境地はもとより容易には味解出来ないし、「帰ってから」までに描かれた限りの、自責や反省のかけの乏しかった一郎から見れば、この願いはただ飛躍的であり過ぎるようにも感じられる。わずかにこ



の「塵勞」の章に示された反省的な態度や罪の意識と結びつけた時、そのおおよそが髣髴される程度のものにしかなっていないのである。半鐘の音などという象徴的なものかわりに、妻（他<sup>ひと</sup>）の傷みを自分の傷みと感ずることが出来たら——そういう境地に邈出することが出来たら、一さいを自分の内部の風景（或は問題）として処理することが出来るようになるのであるろうという程度のものである。「帰ってから」までで、人間に対する不信や孤独地獄苦を見つめ、それが周囲にまきちらす悲涼な悪害を見尽して来た漱石は、この「塵勞」まで来て、一

郎の自意識や反省を鋭く追求したことによって、そういう境地に遡出する以外に彼の苦悩の解決はあり得ないことに想到したことになるのだと思う。離れて眺めるだけの消極的な自己保身でなく、自己解体から脱却への過程が、こうしてこの章あたりから彼の前にひらけずにはいないことになったのである。せつかく『それから』の代助を退いて守る自己保身から動き出させながら、松本や須永にまで結局はその代助が出て来たところに引っこんでしまうような結論を与えてしまうようなことになっていた作者が、ここではじめて新しい結論に向いはじめた

のだともいえよう。それが探求として一つの徹底を示すものであったのはいうまでもなかった。

が、直の傷みを一郎の傷みとして描くことがまだ出来なかつたばかりか、まだ相当に強い優越意識を一郎に残させ、余人もまた彼と同じように細い針金の上を歩くべきだというような要求を持ち出させたりしている『行人』では、それはまだ混沌の中に示された一筋の観念的な希求として語られているだけで、生活化された真実として表現されたものにはなっていないなかつた。それが可能になるためには、直や一郎をあるが如くに作り上げている根

本の事情に迫って、その客観的な事情そのものの中に問題の解決を求めて行くようになるか、でなければ、直を傷つける一郎の罪の意識をもっと深く掘り下げて、宗教的な得脱の工夫に沈湎させるかするのでなければならなかった。次の実験小説として『こゝろ』が生まれねばならなかった所以だし、それを必至としただけ『行人』の実験は十分周到になし遂げられたとはいえなかったのである。冒頭の章から伏線となっていた人間のそれとは知らずに犯す罪の問題が、最後の章である「塵勞」でもう一度観念的に押出されるまで、十分効果的に処理されな

かったことが、むしろその理由であった。そのため、この作は、はじめにも書いて来たように、「須永の話」の主題の中から、人間への不信と孤独地獄の悲涼さだけを主として抽出したものであったかのような、印象を与えらることになっていくのだと思う。複雑なものを持ちながら作品にはその一面の消息だけを盛りこむことになってしまふのを常としたような初期以来のこの作者の作風が思われるわけだが、それなりに、これをそうした人間関係の能動やそれ故の荒涼たる生のすがたを描いただけのもものと見ても、深刻な感銘があるのは否定出来まいと思

う。縦の親子の關係にも横の夫婦や兄弟の關係にも、いろいろの断絶を持たねばならなかった明治時代の人間生活の不幸を、それは少くとも最も深刻に描き出したものの一つであつたのである。それが家とか結婚とかいうもののあり方と根深くからみ合つたものである点からいえば、これを間接的ながら明治時代の家の暗さを描いた作品と見ることも出来るであらう。

そういう点での深刻さにおいて特徴的であるとともに、はじめから結論のわかつた世界の内側に、網の目をひきしぼるようなかたちの追求を加えて行くというこの

作の構成法が、破って出るといふ積極的な発展性を見失った心境を、それとなく示唆するようなものになっていくことなども、注意されていいことになるのではないかと思う。

(昭和二十九年十二月稿)

## 『ころ』

縦にも横にもつながりを持たない人間の孤独なすがたを見つめるとともに、その孤独の底で互に傷つけ合わずにはいない人間の罪深さを描こうとした『行人』は、上記の通りその後の方の主題を十分書き生かすところまでは行き得なかった。結婚する気もない千代子のために嫉妬するばかりか、高木の頭に重い文鎮をうちこむ自分のすがたを幻想して愕然とした須永市藏を書いた『彼岸過迄』の作者は、当然そこに満されぬ気持の残るのを感じたる



う。次の実験小説『こゝろ』はその不満の中から生れて来たような作品である。大正三年四月から八月までやはり朝日新聞に連載された。

例によって小宮豊隆の『漱石の芸術』によれば、この時の作者は幾つかの短篇を書くつもりであった、その一つに予定された「先生の遺書」が新聞小説として百回を越える長編小説『こゝろ』になってしまったのだという。

「忍耐の像」であると同時に解けない「謎」である女性の問題や、学問が知識人と民衆一般との間に越えがたい溝を作ることのふしぎさなどが、上記の通り『行人』に

は新しい主題として浮び上っていないながら、それがまだまともには取上げられていなかったり、十分追求しきれられてはいなかったりした。予定された短篇の中には、ことによるとそんな主題が考えられていたのかも知れないと思う。少くともその後者が予定された主題の一つになっていたことは、『こゝろ』の構造そのものが示しているようだ。

『こゝろ』は「先生と私」「両親と私」「先生の遺書」という三つの部分から成立っている。そういう短篇を並べて、これを傍観者（或に観察者）的な「私」という副

人物をもつてつなぎ合せている点では、やはり『彼岸過迄』以来の形式を踏襲しているわけだが、上記のような想像は、その後にも少くとも「私」を主人公とした一・二章が予定されていたのではないかと思わせる。が、それのない現実の『こゝろ』とすれば、すでにいわれている通りはじめの二章の独立性は乏しく、わずかに「先生の遺書」への導入の役割を果しているに過ぎないとも見られる。少くともその部分は、主題的な追求が稀薄——とあっていけなければ明確さを欠いているため、一見しては特殊な意味や重さを感じさせないようなものになって

いるのである。

が、『彼岸過迄』の森本の話にも相当の意味を含め、『行人』の「友達」の章には見て来たほどの伏線をひそませていたのであった。作者は、事実はこの二章でも相当重大なことを語ろうとしていたのであったらしい。それがこの作の書き出しやそれにすぐ続いた「先生」と「私」との出あいを、いずれもかんたんに読み過してはならぬものになっているのである。夏休みを鎌倉で過すため友だちの宿に落着いた「私」は、母が病気だから郷里に帰れという電報を受取った友達が、その重大な内容を持つ電

報を少しも信用しないのを見た。実際は縁談が待っているのだが、それに気がすすまないので帰省もせずにいるのだという。少し言葉は大げさだが、ここにはいきなり知識人と両親ないし地方の生活との乖離が物語られていることになるのではないか。次に、結局友だちが帰郷して一人になった「私」は、或日西洋人とつれ立って来た先生が、大勢の人々のばちやばちやっている浅いところを通り越して、誰もいない沖の方でしばらく泳いだ後、またすうっと上って来てそのまま帰ってしまうのを見、そういうやり方に興味をそそられて、「非社交的」な先

生に近づくのである。大勢の人々とは離れた沖の方で西洋人とただ二人優遊する「非社交的」な「先生」ということにはむろん寓意があるであろうし、とすればその寓意が何であるかは、わざわざ説明するまでもあるまい。

『行人』で学問が民衆と知識人を距てるものとなることをなげいていたばかりか、『それから』で西洋の模倣的な輸入がわが国の文化を浅薄に歪んだものとしていることを怒っていた作者を知るものにとって、これは作者がいよいよその問題に切りこもうとする姿勢をとりはじめたのであることを、思わせずにはおかないものになって

いるのである。『それから』の上記部分と似たような内容の『現代日本の開化』(明治四十四年)のようなものもあつた作者である。

そういうものを連想させるような書出しをもつてはじめられた「先生と私」には、「私」の先生に対する深い傾倒が語られている。月に一度ただ一人で友人の墓にお参りするごとと、細君を深くいたわりながら時折音楽会や小旅行などに出かけることのほかには、別段何をしていないといふのでもない先生にひかれて、先生が社会に立つて働こうとしなくなつてしまつた事情などを、「私」

は何とかして知りたいたいと思っっている。にもかかわらず、次の「両親と私」の章に書かれた父に対しては、彼がすでに死病にとりつかれているのを、案じないのではないにもかかわらず、特にそのためにもどうするといふのでもない。大事なところに行くとはぼかされたり逃げられたりしてしまうにもかかわらず、先生と話していれば一向あきないのに、父とは何一つ話すこともなく、わずかに炬燵の中で将棋をさすくらいのことしか出来ない。それさえすぐにあきて欠伸になってしまふ。大学を卒業した彼のために田舎風の大ゲサなお祝いをしてくれようとする



ことなど、むしろ滑稽な迷惑としか感じられない。しいにはもう危篤状態に入っている父に置手紙をして、思いがけない遺書をとどけてよこした先生のところを駈けつけてしまう。——この対比はいうまでもなく「よけい者」化した知識人と素朴なかわりに旧い習慣になずんでいる田舎の人々、ないし彼等の生活ぶりの距離を、具体的に描こうとしたものである。だから人々が大学を出たらすぐに就職して何かするものと思っっているのに、「私」は一向就職などしようとは思わないし、先生もはじめからそんなことで心配してくれるような人としては

描かれていないのである。わが国の近代を特徴づけた輸入文化が、単なる輸入文化であるが故に民衆の中に根を下ろさず、その意味で浮上った文化人の世界を形造くることになっていったかたちが、とにかくそこに指摘されていることになる。ただ、文化そのものがどのように歪んでいるのか、どのような点で民衆生活から乖離したものになっているのかが、具体的には少しも描かれていないために、書き方が象徴的というよりむしろ寓意的なものになっているのは、上記のような冒頭だけからでも感じられよう。それに作者は、そういうことをすべて学問を

することの弊として描き出しているような趣もあった。

先生も遠く東京で学問したため家を失ったし、「私」ところでは父の死後どちらも郷里に住みつくまいとして「私」と兄とが争っている。兄もまた遠く家を離れて九州の方で生活しているのである。『行人』では一郎が学問に打込んだから非社交的になったと書いていたし、こうしてすべてを学問のせいにしていくところに、ふと考えたことに何もかもひきつけて行かずにはいないというような、例の一途な偏癡性を感じさせるとともに、そういう問題への漱石の理解力にまだ相当のおぼめかしさが

あつたのであることをも感じさせずにはおかぬわけだが、とにかくそこに、地に足のつかぬ近代的知識人の生活に対する、作者の鋭い反省があつたことは否定出来ない。少くとも『野分』の頃までは学問に強い誇りを感じ、そういう自分の優越を信じていたのであつた漱石として、これはすでに深い悲しみと悔いとをこめた懺悔のようなものであつたことになるのではないか。一見安易な導入部とのみ受取られそうな「先生と私」や「両親と私」の章も、そう見て来れば決して軽くは見過されぬものになるのだと思う。かつて二葉亭が『浮雲』のお勢に見た

問題が、こうして新しく主体化されたものとして打出されることになったのである。その意味でこれは直ちに『それから』の世界に連なるものであったことになる。

が、『こゝろ』におけるより主要な見どころが、第三章の「先生の遺書」にあることはもとよりいうまでもない。遊学中伯父に裏切られた先生は、その恋愛において自分の汚さのため友人を殺した。与えられた条件次第で簡単にそういう過ち——罪を犯すように素質づけられている人間に対する怖れが、こうして先生をもう動けない人にしてしまったのである。高木の頭に文鎮を打込もう

とした須永の問題が、ここまで発展させられることによつて、『行人』ではまだ必ずしも明確ではなかつた一郎の罪の意識も、定着すべきところに定着させられたことになるのである。『行人』の孤独地獄苦はまだ主としては他を信じられないが故の苦悩であつた。だからその苦悩にはなお優越意識がからみついていた。こうして他どころではない自分さえ信じられなくなつた先生の世界は、もう私をさえ断滅した虚無の世界でなければならなかつた。そこで死なずに生きているとすれば、それはもう一さいの私を棄てた奉仕の生でなければならなかつ

た。激動の中で死ぬことの出来なかつた先生は、だからせめて汚れのない「純白なもの」を守ろうとして、細君への奉仕的な生活に入ったのである。動くことを怖れて社会との交渉を断つことを覚悟すると同時に、若い「私」を前にしてわざわざ「細君のために」というようなことを口にする先生がそこに生れた。「一筆がきの朝顔」や「お貞さん」は、こうしてこの作に描かれた細君のような、「純白なもの」にと晶華されて来たのである。従来『こゝろ』が漱石作中でも特に重視されて来たのは、こういう点に示された作品としての深さのためであった。

それはむろん正しい評価であるに相違ないが、そうしていわば一種の宗教的得脱に入ったのであるように見える先生が、やはりその「純白なもの」を汚すのを怖れて出来るだけ自然死を装いながら、結局妙なかたちの自殺をしてしまったのであることには、その点との関連だけからでは説明しきれぬものが残るようにも思われる。尤もそれも、ただ死ぬべき折を待っていた先生が、たまたまその機会を得ただけのことだといつてしまえば、それまでのものかも知れぬけれど、少くともそこに死んだ友人に対する贖罪意識を食み出したものが含まれていたの



であることも、争えぬ事実であろうと思う。

私はKの死因を繰り返しく考へたのです。其当座は頭がただ恋の一字で支配されてゐた所<sup>せい</sup>存<sup>せい</sup>でもありませんが、私の観察は寧ろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落着いた気分で、同じ現象に向つて見ると、そう容易<sup>たやす</sup>くは解決が着かないやうに思はれて来ました。現実と理想の衝突——それでもまだ不充分でした。私は仕舞にKが私のやうにたった一人で淋しくって仕方

がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑ひ出しました、さうして又慄ぞつとしたのです。私もKの歩いた路をKと同じやうに辿つてゐるのだといふ予覚が、折々風のやうに私の胸を横過り始めたからです。

ここにはむろん自分さえない虚無の世界の冷厳さに戦慄する気持が含まれているのであろうから、罪の意識と不可分なものでないには相違ないが、それが特に「現実と理想の衝突」などを持出した上で、「淋しさ」という角度から取上げられているのを見ると、やはり「先生と

私」や「私と両親」に語られて来たこととも、一筋のつながりがあるのではないかと思わせられる。誤った学問のために、郷党——一さいの伝統からも民衆からもはなれたところに、孤独な生を送らねばならぬものの「淋しさ」である。人間の罪深さを怖れるが故に、動けなくなつた人としてのみ描かれているような先生も、反面そんな罪の意識などなくても、やはり社会的には動けぬ「よけい者」であつたのではないか。大学を卒業しながら、就職は愚か、何をしようとする気になつていなくてもない「私」は、むろんそうした「よけい者」の卵だし、そ

う思えば先生もまた彼に何をさせようとも考えてはいないではないか。この作でははじめからインテリとはそういうものとして書かれているのだともいえよう。とすれば、そういう先生の感ずる「淋しさ」は、一つ裏返せば、そういうインテリを作り上げた学問をよりどころとして仕事をして来たものの、悔いと犢罪との気もちに連なるものともなるのではないか。乃木大将とともに明治天皇のあとを追う気になった先生の「殉死」には、そういう意味での犢罪的な気もちもこめられていたのではないかと思う。ともすれば父の病気を軽視しようとする「私」

にいろいろの警告を与えたり、看病しているはずの「私」を呼びよせようとした自分の過ちを強く詫びたりしているばかりか、その死において「私もすぐお後から」というようなことをいった「私」の父と同じような人間であろうとしていることなどが、そのことを相当強く感じさせる。その意味では先生の死は近代知識人（文化人）への訣別であり、従って素朴にして謙虚な（ということとは求める心の少い、ということになるろう）民衆の一人としての更生への希望だったのである。散歩の途上でふと見かけた二人づれを嫉妬した「私」をとがめた「先生」が、

その「私」への処生の参考として「遺書」を書いたというのも、一面においてはむしろ我執への戒しめであると同時に、存外そんな点との関連もあつたからなのではないかと思う。少くとも、こう解釈した時、「先生と私」や「両親と私」の章も、「先生の遺書」と緊密な関係を持つことになるのだと思う。先生の死はだからつまりは我執の断滅と民衆の生活から乖離した近代知識人的な生活からの脱却を象徴するものと解釈されるのである。

ただその後者が、「先生の遺書」の章には、あまりにわずかな影をしか落していないところに、新しい主題に

即してとかく一面的になりやすい作者のいつもの探求態度が思われるとともに、「先生と私」と「両親と私」の二章にせつかく伏線を伏せながら、こうしてそれを十分生かすきれなかつたことが、はじめに書いたようにこの後になお「私」を中心とした一・二章を予定していたのではないかなどと想像させることにもなるのである。その想像は、この作の後に書かれた『道草』が、どうかするとその一・二章に当るものであつたのではないかなどとも思わせる。『道草』が『行人』に主として書かれた孤独地獄苦と、『こゝろ』に主として語られた我執の醜

さとをない合せたような作品だということも、必ずしもそういう想像と乖離しきつたものではなさそうに思う。

とにかく、そんなことを思わせるだけ、全体としての『こゝろ』にはなお書き尽されぬものの残されていたこととなるのも否定出来ない。それが「先生と私」や「両親と私」の章を、主題的な追求の稀薄な、「先生の遺書」への単なる導入の役割を果しているだけのものに過ぎないように感じさせる理由ともなっているわけだが、そこに一面漱石の対象に対する理解不足が示されていたのであることもいうまでもあるまい。早くから低徊趣味をと



なえて、対象を縦からも横からもいろいろに眺め尽くすことは主張していても、それは主として現象としての多面性やニュアンスの複雑さを楽しもうとするためのものであったために、その多面性や複雑さを派生させる根本的な理由への探求とは結びつかなかった。知識人と地方の人々との乖離や学問することと旧い家の秩序とが齟齬しがちなことなどを、そういう現象としてはいろいろに見ていても、そういう現象を生み出す根本の事情には想到し得ないために、その責めを学問するということにのみ求めようとする事になったのもそのためだ。それがよ

り根源的な事情に想到して、そういう現象を必至とする社会そのもののあり方や歪みが、同時に個々の人々をも一そう歪めて我執的にするのだということがつかめたら、「先生の遺書」だけが前の二章とは切離されたような深刻さを持つものにもならなかつたであろうし、もしまた一步を進めて、人間の罪深さはそういう社会のあり方などとは関知しない絶対的なものだということが明らかにされることになるとすれば、怖れと戦慄とを誘わずにおかぬ作品としての効果は一そう深刻なものになるだろう。そういうところまで行き得なかつたところに、漱石

の方法の限界があつたことになるのだと思う。と同時に、  
そういう解釈とは或る意味で反対に、例えばKの死因に  
ついて語つた上掲の一節とか、先生の死を決した気もち  
を「私」の父の死に際しての気もちとその意味合いにお  
いて似通つたところのあるもののように書いていたりとか  
いうような、ちよつとした記述に、非常に重大な意味を  
こめようとする性癖が、それだけのことを書くことによ  
つて各章間の連関は十分につけられるというような安心  
を、漱石に持たせていたように感じさせるところもある  
のではないかと思う。早くから低徊趣味をとなえていた

漱石に対して、これは一見矛盾した解釈のようにも思われるけれど、『行人』の「友達」におけるさまざまな伏線の置き方などを吟味すれば、それが十分考定されることにもなるのではないであろうか。「ひとの病苦はわからない」ということが、人間の内面生活の理解し難さを語ることへの伏線となる世界なのである。そうしてわずかに語られたことに非常に大きな含みのこめられている場合が、この作者の作品にあっては決して少くないのである。それが単純の中に複雑を見る漱石の頭の回転を思わせる反面、それをただ見ただけの単純さにおいて描い

ておくことが、どうかすると描いて尽さぬ筆力の不十分さを生むことにもなっているのではないかと思う。捉えた題目に一途に執着して行く一面的な偏癖性と、片言隻語にもこういう含み多さへの理解を求めめる態度とが、周囲の人々の彼を神経衰弱の半狂人扱いすることになった、一つの理由であつたかも知れないくらいのものだ。そういう点を重視すれば、「先生と私」と「両親と私」という二つもの章に、いろいろのことを書いておいた『こゝろ』に、書き足りぬことなどあるはずがないと思つていた作者であつたかも知れないとも思うのである。

が、想像はいずれにしても、全体としての『こゝろ』が、そこに提示された問題のすべてを書き尽し得たものでないのは否定出来ない。が、それなりにそれが、学問や知識人のあり方とか知識人と地方人の乖離とかいう、重大な社会問題を捉えて、文学が当然そういう現象を生む社会そのもののあり方に目を向けねばならぬことを示唆するとともに、そういう社会現象との関連において、人間主体の歪み（醜さ）を吟味し、この点ではその奥深いところまで究め尽したものであることは、むしろ軽々に見過していいことにはならない。人間そのものの批判

的な吟味を使命とした近代文学が、こうしてようやくその底につくところまで来たのだともいえよう。人間の根源悪をどうにもならぬものと見て、避け難く宗教的な方向を旨ざすものになるか、人間やその生活の歪みの根源を根本的には社会悪の問題に帰するものと見て、その方向への闘いを求めて行くか、いずれにしても近代文学がその方向を変えねばならぬのであることを、それは示唆せずにはいないのである。この作の後に『私の個人主義』(大正四年)のような講演などを示して、なお片づききれぬ心境を思わせたものの、やがて我執とともに知性を棄て

て、素朴にして謙虚な生を意図するようになった漱石は、その必然の道を前者に即して半ば宗教的な「則天去私」の境地を祈念する人になったのであったが、その点この作にもわずかながら示唆されている通り、西洋の誤った輸入の仕方に過根があったとすれば、それは当然そういう誤りを犯した知性の不足を反省させるべき事柄になるはずで、そこから知性（学問）の否定に傾いたのは、むしろ意外な飛躍であったことになるのでなければならぬ。それが一人一人の人間を書くことを建前とし、一人の人間の中にあらゆる問題を見ようとした近代文学であ



ったが故に、ここではすべてが一人の先生の中に凝集されようとしていた、それを、先生、「私」、その兄など、多くの人々の場合を通して、そのすべてを規制するより根源的であると同時に客観的な事情に迫るといふ知的な操作が、少くともその飛躍の前になければならなかったはずであろう。『行人』の構成が破って出ようとする積極的な意欲の消磨を思わせるといふことを前に書いたが、相似た構成を持つ『こゝろ』は、その新しい主題をつきつめた結果、こうしてとにかく何かしらの新しい打開がなければならぬところにまで到達したことになるの

であつた。その打開を漱石が十分に成しとげたとまではいえぬにしても、『行人』に次いでなされたこの作の実験が重視されねばならぬ所以だと思ふ。それだけにまた、「先生と私」と「両親と私」における主題の追求が、「先生の遺書」の場合ほどにも十分には遂行されなかつたことを、惜しまずにはいられないのである。「よけい者」的な近代知識人のあり方の問題が、いつの間にか人間一般の根源的な問題になつてゐるような飛躍も、つまりはそのこととの関係においてあつたものだということになるであらう。書くことが少し前後したが、恐らくここま

で来たところで、漱石は、誤った輸入の仕方を問題とするかわりに、輸入されたもの自体を否定する気持に傾いてしまったため、東洋的な脱却への飛躍を意図せずにはいられぬことにもなったのであろうと思う。『野分』で一応脱却を意図されたものが、その脱却が十分でなかったため、この大事な機会にまた強く漱石にかえって来てしまったのだといえるのかも知れない。

(昭和二十九年十二月)



日本文学電子図書館

---

## 夏目漱石の作品

著 者：片岡良一

制作者：宮澤一郎

出版社：鷺の宮書店

昭和42年12月15日 印刷

昭和42年12月20日 発行

---

日本文学電子図書館